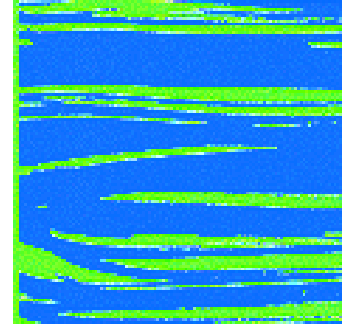


# 日本行動分析学会ニューズレター J-ABA ニュース



2007年 春号 No. 46 (2007年6月4日発行)

発行: 日本行動分析学会 理事長 藤 健一

603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 立命館大学文学部心理学研究室内

FAX: 075-465-7882 (日本行動分析学会事務局と明記)

URL: <http://www.j-aba.jp/>

E-mail: [j-aba.office@j-aba.jp](mailto:j-aba.office@j-aba.jp)

---

第25回年次大会のご案内 ..... 第25回年次大会準備委員長 堀 耕治  
第4回学会賞(2006年度)の受賞者が決まりました!

.....担当常任理事 浅野俊夫・島宗理  
連載: いま,こんな研究しています(1) .....八賀洋介(慶應義塾大学)  
「問題児なんていない」講演会を終えて ..... 青木愛弓  
自著を語る: ハワード・S・ホフマン著『刻印づけと嗜癖症のアヒルの子? 社会的愛  
着の原因をもとめて』 ..... 森山哲美(常磐大学)  
事務局だより: 学会ブログを御覧下さい ..... 事務局  
編集後記 ..... ニュースレター編集部

---

## 第25回年次大会のご案内

日本行動分析学会第25回年次大会準備委員長 堀 耕治

すでにご案内しておりますように、2007年度の年次大会は立教大学でお世話させていただくことになりました。今回はちょうど25回目の大会にあたります。「行動分析学研究」第1巻掲載の会報には学会発足当時の数年間の活動が記されていますが、それによれば、第1回大会は1983年11月に慶應義塾大学で開かれており、研究発表が8件と講演が1題。その後も数年間は、10件に満たない研究発表と1件の講演またはシンポジウムという構成で開かれていたようで、それを考えますと、このところ、例年の大会の充実ぶりには改めて目を見張るものがあります。当番校としては、この点がいささかプレッシャーではありますが…。

さて今年の大会の開催日程は、真夏の暑い時期で恐縮なのですが、8月4日および5日の2日間といたしました。会場は、立教という世間では都会の大学というイメージらしいですが、その都会の池袋キャンパスではなく、2006年度開設の現代心理学部を含めて3つの学部が置かれている新座キャンパス(埼玉県)です。お間違えのないよう、お願いいたします。池袋から東武東上線で約20分の志木が最寄り駅となります。JR武蔵野線新座駅というアクセスもあります。詳しくは大会ホームページの「会場アクセス」をご覧ください(ホームページURLは、<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/j-aba2007/>)。どちらの駅からもそこそこ距離があります。徒歩

の場合は、十分時間の余裕をもってお越しください。タクシーは、志木駅に関する限りは、南口（大学側）北口ともおおかたの時間帯ですぐ乗車できると思います。立教大学には初乗料金で到着します。バスの利用も可能です。バス時刻表は大会ホームページからリンクを張る予定です。なお新座駅からのタクシー利用は、客待ちタクシーが少ないので、お勧めしません。

大会の内容につきましては、詳しくは7月上旬発送予定の大会プログラム・論文集をご覧くださいと思いますが、約70件の研究発表に加え、自主企画シンポジウム1件と、学会企画シンポジウム2件（研究教育推進委員会企画と倫理委員会企画）を予定しています。また例年通り論文交換テーブルを設けます。大会前日の8月3日には、やはり立教大学新座キャンパスにおきまして、埼玉県教育委員会の後援で特別支援教育をテーマとした公開研修会を開催いたします（「埼玉県における特別支援教育の行方 - 学びのコミュニティはどこまで広がるか - 」。日本行動分析学会の会員は2000円にて当日参加が可能です（非会員当日参加は5000円）。こちらの方も奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

そして今大会、「目玉」は何ととっても、メリーランド大学ボルチモア郡校（UMBC）のA. C. Catania教授です。お招きできたことをたいへんうれしく思います。改めてご紹介するまでもありませんが、Catania教授はJEABをはじめとする学術誌に膨大な数の論文を発表されてきた実験家、理論家であると同時に、版を重ねているご著書“Learning”や編者となられた“Contemporary research in operant behavior” “Variations and selections”といった数々の論文集からもわかるように、研究、教育、普及啓蒙などさまざまな側面で、行動分析学に多大の貢献をしてこられました。Catania教授には特別講演をお願いしました。今回は、遅延強化に関する理論的分析とこれに基づいたコンピュータシミュレーションや動物モデルの行動から、ADHDの行動

メカニズムに迫ろうとするたいへん意欲的なご研究についてお話しいただきます。基礎、応用を問わず、本学会の会員には興味深い内容であることを確信しております。日本語要約と通訳付きの質疑応答を準備していますので、学部生でも内容は理解できると思います。関心のある学生さんが周囲におられましたら、当日参加も可能ですので、どうぞ声をかけていただければと思います。

Catania教授には、実はもう一つの企画でも「ご登場」いただきます。供覧用として、UMBCにおける動物デモンストレーション授業を収録したビデオ映像を提供いただきました。ハト篇（約1時間）とラット篇（約30分）があります。これらを大会2日間にわたって何回か上映いたします。そもそもたいへん面白い内容ですし、ご自分の授業で同様のデモを構想しておられる方々にはとても参考になると思います。なおハト篇の方は、Catania教授の長年の同僚であり、共同研究者でもあったEliot Shimoff教授（2004年他界）の在りし日の姿が収められています。お二人の「掛け合い」をお楽しみください…とりたいところですが、Shimoff教授がやたらに早口で、会話部分のリスニングはなかなか厳しいです。ともあれ、特別講演ともどもご期待ください。

なお、大会準備委員会では宿泊の斡旋はいたしません。宿泊の必要な方は、恐縮ですが、各自手配くださいますようお願いいたします。大学周辺にはホテルは少ししかありませんので、会場近くでの宿泊をお考えの方には早めのご予約をお勧めいたします。少し離れてもよいとお考えでしたら、都内よりはむしろ、東上線を志木からさらに下って、川越でお泊まりになるのもよい選択かもしれません。古い街並みがよく保存されている観光スポットとして有名です。志木駅までは急行で15分程度。ただし川越も宿の数は限られます。お早めに手配ください。

最後にもう一つ、くれぐれもお願いしておきたいことがあります。大会当日、学内の食堂は営

業いたしません。弁当の予約はすでに終了させていただきました。また大学周辺にはあまり飲食店がありません。ご注意くださいように。

それでは、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

## 第4回学会賞（2006年度）の受賞者が決まりました！

担当常任理事 浅野俊夫・島宗理

去る、3月18日、常任理事会にて選考委員会が開催され、日本行動分析学会第4回学会賞（実践賞）の受賞者が決定しました。

実践賞は我が国における行動分析学を応用した優れた実践の普及を目的として設置された学会賞です。社会的な問題の解決のために行動分析学を活用し、実績をあげている個人や組織を、会員・非会員を問わず選考対象にしているところに特徴があります。

今回の候補者の方々はどなたも卓越した実践を進めておられ、それぞれの分野で、行動分析学の社会的な認知や普及に大きく貢献されております。よって、選考委員会では、厳正なる選考手続きの結果、以下の3名の方々の活動を讃え、同時授賞とすることに決定いたしました。勿田文記氏（独立行政法人高齢・障害者雇用促進機構 障害者職業総合センター）

行動分析的な原理や技法を、障害者職業リハビリテーション技法の開発や活用に役立てたこと、また、障害者職業カウンセラーへの啓蒙活動として、行動分析学の知見を広く普及された実践が評価されました。

厚生労働省による、発達障害のある人の雇用管理マニュアル作成委員会にも参画され、同マニュアルにおけるQ&Aを応用行動分析的な視点からまとめられた点も高く評価されました。

### アニマルファンシィアーズクラブ（AFC）

アニマルファンシィアーズクラブはわが国で初めて、強化の原理に基づくドッグトレーニングを実践する組織として、1993年

に佐良直美氏によって創設され、現在では100名を超える一般オーナーやトレーナーから成るクラブです。犬と人間との共生関係の構築を目指し、行動の原理を使ったトレーニングを普及されたことが評価されました。

普及のためのビデオ教材や啓蒙書を出版されており、従来は罰でしかトレーニングできないと考えられていた犬の競技種目においても正の強化を用いて成果をあげ、現在、業界の注目を集めている点も評価されました。

### 京都市立特別支援学校（全7校）代表 朝野 浩氏（西総合養護学校校長）

京都市立特別支援学校による、行動分析的な原理や技法を応用した、「個別の包括支援プラン作成・実践マニュアル」の公刊と、教育・支援サービスの向上に関する実践が評価されました。

京都市では全国に先駆けて、養護学校の総合化、地域化に取り組みましたが、その中心に応用行動分析学の考え方を取り入れ、専門的な研修会を130回以上も実施されました。さらに西総合支援学校では、全国で初めて、教員免許を持たない応用行動分析スタッフを特別非常勤講師として採用するという画期的な実践もされており、この点も高く評価されました。

授賞式は日本行動分析学会第25回年次大会にて行います。皆さま、お誘い合わせの上、ぜひご参加下さい。

【授賞式】

- 日 時：2007年8月4日(土) 17:00-17:40
- 場 所：立教大学新座キャンパス(埼玉県新座市北野)

- 大会 Web サイト：

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/j-aba2007/>

連載: いま, こんな研究しています (1)

八賀洋介 (慶應義塾大学)

私は現在慶應義塾大学博士課程にて、坂上先生の指導の下で研究をさせて頂いております。今回、ニューズレターへの寄稿のお話を幸いにも頂きましたので、この紙面を借りて簡単な自己紹介をさせて頂きたいと思っております。私は基礎研究に従事しておりますが、これを機に行動分析学内でも研究領域が異なるために普段は接する機会の少ない多くの同輩・諸兄の興味を引き出し、交流を促進する契機となることを切望いたします。

私は昨年度の日本行動分析学会で催されたシンポジウム「行動変動性の実験研究およびその応用可能性」にて話題提供者の一人としてお話をさせて頂きました。そのため、ご記憶いただいている方もいらっしゃるかもしれませんが、私の研究は強化することによって行動の変動性の増減を制御すること、またそのプロセスの分析や、概念的検討などに該当します。この研究テーマは「後続事象による行動の強化」や「反応形成」のような行動分析学が基本的手続きとして共有している事柄へ密接な関係がありますので、基礎・応用問わず学問的興味を喚起しやすいテーマです。

次のように申し上げるならば行動の変動性にご興味をお持ち頂けるかもしれません。私たちは強化や弱化などの後続事象により行動を制御しますが、次の瞬間に生起する行動を完全に予測できるわけではありません。そこで行動は強化の随伴関係に従ってクラスとして定義され、私たちは生起率や生起頻度に注目し、確率的な

予測・制御を行っています。確率的に生起する一群のデータの分布には生起の幅があります。これが行動の変動性です。したがって、オペラントクラス(行動)には性質上行動変動性が常に存在しています。あるいは次のような変動性の説明もできます。ベースラインレベルで、さまざまな行動が生起しており、そこから私たちは行動を選択的に強化します。この「さまざまな行動が生起すること」が行動の変動性です。したがって、行動を強化するためには行動の変動性が前提として必要であるということです。このように、根本的に重要な意義が行動変動性には存在するにもかかわらず、これまで、淘汰のプロセスに比べると脚光を浴びることは少なく、制御可能性の検討、理論的進展などはほとんどなかったように思います。

この行動変動性の増減をある種の分化強化手続きを使用することによって制御する研究が私の現在従事している研究分野です(総説として Neuringer, 2002)。Page & Neuringer (1985) 以来多くの基礎研究がさまざまな動物やヒトで行われてきました。一言でまとめるならば、最近あまりやられていない行動の自発に対して強化を行います。一般的な分化強化がある一定の位置への反応やある速さ以上で自発した反応を分化強化することに対し、行動の変動性の分化強化では、反応レパートリーの各頻度を数え上げ、相対頻度が設定された基準以下で生起した場合に強化を行います。その結果として、レパートリーの全体頻度は一様に近づいていくことが知

られています。ここでは一様に近づくほど変動性は高く、最大の変動性を得る場合にはランダムな行動生起になるとされています。この分化強化手続きを使用することにより低い変動状態から高い変動状態まで、行動の変動量を制御することができます。手続きが少々複雑であるため、応用場面での使用がすぐには可能ではないかもしれませんが、これまで考えつかなかったような分化強化基準で強化をするというアイデアや、その結果生じた反応遂行に関する実験的知見を知ること何らかの示唆を持っているのではでしょうか？また、行動レパートリーの生起分布で分類する場合、自閉症児やうつ病のヒトは行動変動性が低くレパートリーに広がりがないと考えられ、一方、注意欠陥・多動性障害（ADHD）児はさまざまなレパートリーを自発するため、常態において変動性が高すぎると考えられます。それらの参加者を使用した基礎研究も散見します。実際のケーススタディでどこまで応用可能であるかは今の私にはわかりませんが、現場に携わる方々が少しでも基礎的知見から刺激を受け、示唆を得られるならば幸いです。

私個人の研究は基礎研究であり、行動の変動性に対する分化強化による制御を伸張するものです。簡単にアイデアをご紹介すると、先行研究によりランダムな行動生起が可能となると示されましたが、ランダムネスは2つの特性があるとみなすことができ、ここで分化強化の対象となっているものは、そのうちの一方であると考えました。その特性とは行動レパートリーの

等確率生起であり、残された特性とはレパートリー間の系列独立的生起です。この系列独立状態へ反応遂行を変容させることは、どのようにすれば可能か、またなぜ可能であるか、その場合に示唆されることは何か、逆に、さまざまな系列依存性を柔軟に形成することができるのか、などといったことに現在は興味を持っています。

また、概念的な問題に関心があります。後続事象により強化されるものはオペラントであり、変動性が強化されるならば、変動性はオペラントです。しかし、レバーを押すとエサがもらえるという関係と行動の変動性を増すとエサがもらえるという関係は同一なのでしょう。オペラントの根本概念に触れるという点で、私には興味深く、また重要であるように思えます。

最後に簡単に行動分析学への思いを述べたいと思います。学問体系として成立するためには厳密な基礎研究が必要ですし、本来応用はそこから生まれてきます。その意味で基礎分野の興隆が高まり、また多くの研究者が新しい知見を共有できるように、基礎研究者が平易に新しい知見を説明する機会を増すことを切望します。一方で、学問自体が社会的営みであるならば、社会的淘汰圧によって消滅しないためにも、社会の要請に答える応用研究の手法を共有することは価値を持つように思います。各研究者がJ-ABAの興隆のためにも、基礎、応用といった隔たりを超えて理解しあう状態がセルフコントロールパラダイムにおける遠くて大きい強化子であるように私には思えます。乱文失礼致しました。

---

## 「問題児なんていない」講演会を終えて

青木愛弓

2007年3月26日(月)に日本行動分析学会公開講座「問題児なんていない!」～「叱る」をやめると子供はグングン伸びる～を神奈川県藤沢市にある日本大学生物資源科学部にて開催、無事終了いたしました。理事会への報告書を提出

したところ、ニューズレターへ掲載しませんかとのお話をいただきました。一人反省会の延長のぼやきのような感想文のような報告でお恥ずかしい限りですが、会員の皆様に読んでいただければ幸いです。

この講演会は、「子供のしつけに行動分析学を生かそう」がテーマで、教室で問題児として扱われてしまいがちな子供の保護者の方や子供のしつけにお悩みの方を対象とし、行動分析学との出会いのきっかけになればという思いが込めて企画されました。元日本大学教授河嶋孝先生には基礎編を、広島大学名誉教授・環太平洋大学教授の河合伊六先生と西日本短期大学準教授・健和会大手町病院救急部・精神科医の久村正樹先生には応用編をお願いしました。いずれの先生方も講師の依頼のメールに対してほんの数時間のうちに快諾のお返事を頂戴し、大変強化されました。

当日は、定員 70 名に対して、60 名（子供 8 名を含む）が来場されました。定刻よりスタートし、和やかな雰囲気のもと講義は進み、スケジュール通り定時に終了しました。開催までのことや当日のことを振り返り、またアンケートの結果（48 名より回答）から思ったことをもとに感想を述べたいと思います。

#### 【来場者は満足したか】

おおむね満足したと思われます。しかし、アンケート結果の詳細を見ると課題は残りました。初めて行動分析にふれる方にとってはまだまだハードルが高かったようです。自由記入の感想でいくつかあったのは具体例がほしかったという要望でした。時間の関係上、具体例があまりだせませんでした。もともと、この講演会では、行動分析学の理論を理解してもらうということが目的でしたが、「ほめるしつけのコツを教えます」という副題から、パターン戦略を教えられると思ったのかもしれませんが。このような講演会があったら教えてほしい、また開いてほしいという声もアンケート上で、また会場で直接頂戴しました。

#### 【参加者の募集について】

郵送に頼ると宣伝費がグンと跳ね上がります。インターネットが普及している現在、ネット上で募集すればコスト削減になると思ひ、ブログを作成し、軽度発達障害のグループの掲示板を

お借りして宣伝しましたが残念ながらほとんど集まりませんでした。慌てて、市内の保育園、幼稚園、小学校へポスターと案内を郵送し、近隣の市町村の学校へはメールを送りました。またタウン誌や新聞にも掲載の依頼をしましたが、メールで予約がいけなかったらしく掲載は 2 社のみでした。結局、封書で発送した分と情報誌に掲載したのが一番効果がありました。講演会前日までにほぼ定員に達しましたが、まだ紙の時代であるのだと痛感しました。

#### 【子供同伴について】

今回は託児はなし、子供同席可としました。2 歳以上のお子さんは講演の間中、離席せずともおとなしくしていました。ただし、今回は女兒が多かったためかもしれません。アニメーションの DVD を用意し、ノートパソコンに映して提供しましたが、これは親御さん、お子さんともに好評でした。

一方で子供がうるさくて集中できなかった、また別室に隔離しモニターで見たらどうかという声もありました。講演会は、ライブで聞くから良いので「困ったときはお互い様」で許容してもらえと思ったのですがそうではない人もいたようです。

終了後、子供を同伴のお母様が「託児ではなく、同席にしてくれたのがとてもありがたかった」とわざわざ伝えて下さいました。涙をこぼしてお礼を言われたので、なぜ託児がだめで同席がいいのかというのは聞けませんでした。子供が騒ぐから、預けるところがないからいけないというのでは、行動分析を必要としている方には来ていただけません。迷子や事故の不安はありましたが、やはり子供同伴にして良かったと思いました。

#### 【一般向けの講演会について】

日本行動分析学会からの補助金のおかげで、参加費無料で行うことができました。ただ、予算に限りがあったので、先生方や当日手伝ってくれた人にも十分なお礼が出せませんでした。意義のある仕事ではあると思いますが、安いお

金で人を働かせてしまうことと、自分自身が無給で労力を提供し続けることはなかなか難しく、次につながりません。とはいえ、有料にしてみれば、来場者を集めるのもより大変になるし、会場費が跳ね上がります。一般向けの公開講座があまり開かれないうのもこのような事情があるのかと思いましたが、諸先生方にお知恵を授けていただき、続けていく方法を考えたいと思います。また、同様の講演会が開催される際には微力ながらお手伝いをさせていただきた

いと思います。

#### 【最後に】

子供のしつけには素人ですが、日本行動分析学会の諸先生方、河嶋先生、河合先生、久村先生、日本大学生物資源科学部心理学研究室の高久先生のお力添えのおかげで開催することができ、また無事終了することができました。心より感謝いたします。また、会員の皆様、遠方よりお越しいただきありがとうございました。

---

## 自著を語る：ハワード・S・ホフマン著『刻印づけと嗜癖症のアヒルの子？ 社会的愛着の原因をもとめて』 森山哲美 (常磐大学)

Hoffman, H. S. の著書 "Amorous Turkeys and Addicted Ducklings: A Search for the Causes of Social Attachment" の拙訳書「刻印づけと嗜癖症のアヒルの子？社会的愛着の原因をもとめて」を二瓶社から上梓しました。

原著は、アヒルの刻印づけ(刷り込み)について Hoffman が長年にわたって実験的に調べた研究の成果をまとめた本です。また実験心理学者としての彼の立場をさまざまなエピソードを交えながら述べた本でもあります。

心理学や行動生物学のほとんどの教科書が刻印づけを取り上げていますので、刻印づけについてご存知のかたは多いと思います。しかし、それらの本の多くは、私が知る限り、刻印づけをはじめて理論的に体系づけた Lorenz の行動生物学的見解だけを紹介しているように思えます。実験室の中で刻印づけを調べると、不可逆性、臨界期の存在、といった Lorenz が提唱した、刻印づけに特有と思われた現象は、必ずしも確認されるわけではありません。Hoffman は、刻印づけの過程がレスポナント条件づけの過程と基本的に異なるものではなく、エンドルフィンの生成を介した嗜癖的な行動過程であると説明しています。



Hoffman, H. S. (1925-2006)

この本を翻訳しようと思ったのは、「訳者あとがき」に記しましたが、私の研究テーマが刻印づけであったこと、さらに一人の実験心理学者の研究に対する姿勢を知るためでした。彼の研究が行動分析学の影響を少なからず受けていたことも理由のひとつです。Hoffman から 2005 年の春に翻訳の許可を得て、ほぼ 2 年がかりで出版にこぎつけることができました。その間、彼からは励ましのメールをいくつかもらいました。このたびの出版の報をいち早く知らせたところ、ご子息 Ace Hoffman 氏から 2006 年 8 月 31 日に彼が 81 歳で逝去したとの訃報を受けました。そ

のころからこちらから送ったメールに返事がなかったで、「もしや」と思っていた矢先の知らせでした。彼の生前に翻訳書に目を通していただくことができなかつたことが、かえすがえす残念でなりません。

Hoffman たちの努力にもかかわらず、刻印づけと、ヒトの社会的愛着の関係はまだ十分に明らかにされていないように思えます。刻印づけ

の基礎的な行動過程についても、調べるべき問題は山積されています。刻印づけを行動分析的な視点で説明する研究の数はきわめて少ないのが現状です。拙訳書をとおして刻印づけに興味を持ち、心理学における動物実験に対して理解を示し、さらに行動分析学の視点でこの行動過程の説明を試みる同士が増えるのであれば、訳者にとってこの上ない喜びです。

---

### 学会ブログを御覧下さい: 事務局だより 事務局

事務局・常任理事会の各委員会からの会員の皆様へのお知らせは、学会ホームページの他に、学会ブログ (<http://blog.j-aba.jp/>) においても

随時掲載されております。是非、ご高覧くださいますようお願い申し上げます。

---

### 編集後記

#### ニューズレター編集部

ニューズレター編集を担当するようになって1年、やっとひとまわりが終わりました。今回から新しい連載として、大学院で活躍する若い行動分析学研究者に、御自分の研究を語って戴く「いま、こんな研究しています」を始めまし

た。執筆者の方には自己アピールの機会を、そして読者の皆様には最先端の研究テーマを知る機会を提供できればと考えております。今後に御期待下さい。

---

#### ニューズレター編集部よりお願い

- ニューズレターには個人情報に記載されている場合があります。御覧になった後、処分の際には十分に御留意下さいますようお願い致します。
- さまざまな内容の記事を随時募集しています。詳しくは望月までメールでお問い合わせ下さい。尚、記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析

学会ウェブサイトで公開いたします。

192-0395 八王子市 大塚 359  
帝京大学文学部心理学科内  
日本行動分析学会ニューズレター  
編集部 望月 要  
E-mail: moc@main.teikyo-u.ac.jp